

無花果の顔

2006(平成18)年11月29日鑑賞〈東宝東和試写室〉

★★★



監督・脚本・原案＝桃井かおり／出演＝山田花子／桃井かおり／石倉三郎／HIROYUKI／高橋克実／岩松了／光石研／渡辺真起子（シナジー配給／2006年日本映画／94分）

……無花果は花が咲かず、実だけになる木。「天才」桃井かおりは、そんな無花果の木に、人間や家族の花と実のつけ方を見たのだろう。彼女が設定したのは、1本の無花果の木に見守られた平凡な4人家族だが、実は4人とも桃井同様（？）かなり変わった人物……？「言葉にできないから映画にした」という「桃井語録」をかみしめながら、摩訶不思議なこの映画を楽しもう……。

第4章

現代の世相を映し出す

映画検定3級の問題にも……

今年6月25日に実施されたキネマ旬報社とキネマ旬報映画総合研究所が主催する第1回映画検定3級の問題には次のようなものがあった。すなわち、

「俳優が数々の出演作を経て映画監督に乗り出す例は、国内・海外を問わず数多く見られる。そのうち、そのまま監督を本業のひとつにする者もいれば、監督は数少ない経験のみに留める者もいる。次の（ア）～（エ）の俳優の中で、劇場用映画の監督経験がない俳優を選びなさい」（問32）。その4枠の回答は（ア）高倉健、（イ）松田優作、（ウ）田中絹代、（エ）桃井かおりで、正解は（ア）の高倉健。

桃井かおりは既に監督第2作……

こんな問題に使われるように、桃井かおりは1991年の『ご挨拶』で既に監督経験がある。10月30日に観た『TANKA 短歌』（06年）では、作家兼作詞家の阿木燿子が映画監督としてデビューしたが、桃井かおりはこの『無花果の顔』が既

に第2作目。流暢な英語を使って、さゆり（^{チャン・ツイイー}章子怡）、豆葉（^{ミシェル・ヨー}楊紫瓊）そして初桃（^{コン・リー}鞏俐）の世話をする置屋の女将としてその存在感を見せつけたのがハリウッド映画『SAYURI』（05年）における桃井かおりだったが、これによって国際的に高い評価を得た彼女は以降ロサンゼルスに拠点を移し、世界に視野を広げた躍進を続けている。

既に50歳を超えているにもかかわらず化粧品のコマーシャルにも登場し、その美しい素肌を誇っている彼女は、もともと才能豊かなことは明らかだから、女優業はもちろん作家、歌手、ジュエリーデザイナーの顔の他、今後は映画監督としての顔がさらに広がっていくのでは……。

桃井かおり流感性のかたまり……

この映画は、桃井かおりが原案から脚本・監督そして出演までしている。1971年に映画デビューした桃井かおりは、『幸せの黄色いハンカチ』（77年）での武田鉄矢との掛け合いや『疑惑』（82年）での球磨子の名演技などが出色。そして国内外で数多くの賞を受賞している名女優だが、どこか普通とは違う独特の雰囲気と存在感がある変わった女優。

この映画の元になったのは、そんな彼女が『時刊 MOMOIKAORI』に連載していた小説（『無花果の顔』と4本の短編『おんな隣り』『三連坂』『いちじくの木』『サザンカ赤い花』）とのこと。無花果は文字どおり、花が咲かないで実だけがある木で、私も昔はよくその実を食べていたもの。そんな無花果をタイトルとし、映画全編を1本の無花果の木が見守っているこの映画は、まさに人間の営みを桃井流に無花果の木に象徴させて描いたもの……？

圧倒的存在感と「桃井語録」

他方、プレスシートでは、「ヒロインの娘を演じるのは、本作が映画初主演作となる山田花子」とあり、「キャスティングの苦労がひとつ減るから」という理由で、母役には自身を起用したとのことだが、私の目にはどう見ても主役は母役の桃井かおり。それはセリフが極端に少ない山田花子に対して、あの独特の口調による桃井かおりのセリフがやたら多いためではなく、やはりその存在感が圧倒

的だから。つまり、この映画はそのすべてが桃井かおりの感性で成り立っている摩訶不思議な映画なのだ。したがって、「文学でも、音楽でも表現できないから、映画があるんだと思う」とか「言葉にはできないから、映画にしたので」、などの「桃井語録」は今後永遠に残るのでは……？

日常生活 vs. ハプニング……

映画の冒頭は、平凡な4人家族のフォンデュ鍋を囲んだ食事の風景が描かれる。その家は、今ドキ見ることの少ない中庭のある古い平屋の木造住宅。そして、食事もしスとテーブルではなく、いわゆるチャブ台で台所からガスのホースを長々と引き、いちいち料理を運んでくるのは大変そうだが、母はそんなことは何の苦労とも思っていないようで、口と共に足も実によく動いている……。今日はかなりのごちそうだが、毎日、毎晩こんな楽しそうな食事風景がくり広げられているだろうことは容易に想像できる。

ところが他方、突然やってくるのがハプニング。あんな善良そうな、工務店につとめている父（石倉三郎）がなぜか朝帰りをした挙げ句、家を出ていき、今はウィークリーマンションで生活しているとの連絡が……。こりゃ一体ナニ……？ ひょっとして浮気……？ 母がそう考えたのはムリはなかったが、さてその真相は……？

人間の命なんてあっけないもの……

父が長期間家を空けていたのは、何とある工事現場での手抜き工事の後始末をするためだった。なぜそんなことを……。それは、職人氣質の父としては、他人の工事であってもそんな手抜きを許せなかったため。しかし、あくまで他人の工事現場だから、昼間は作業することはできないため、父は夜中の徹夜作業で黙々と……。

そして、今日はやっとその父が帰ってくる日。温かい卵かけご飯に塩辛とビールを準備し、「お父さんが帰ってくると、うるさくていいわ」とニコニコ顔の母だったが、その直後は、その父がだらしなく寝そべっているシーン。こりゃ一体ナニ、と思っていると、どうも父は仕事場で倒れ死んでしまったらしい……。も

っとも、母のおしゃべりは相変わらずで、通夜の準備で忙しそう。人間の命なんてホントにあっけないものだということを、桃井流切り口でしっかりと……。

さらなるハプニングの連続だが……

葬式用の写真を選んでいた娘が偶然目にしたのは戸籍謄本だが、そこには何と自分の続柄が養女と記載されていた。これは一体ナニ……？ 他方、夫と死別した後、今は娘と共に東京タワーが見えるアパートで暮している母は、つとめていた居酒屋の主人（高橋克実）と再婚することに……。さらに驚いたのは、突然娘が妊娠していることが判明したこと。そのお相手は何となく交際していた男（岩松了）だったが、結婚することもなく娘は女の子を出産。平凡だった4人家族にこんなハプニングが次々と……。

もっとも、母が再婚した新しい父は、変人だがやさしい男だったらしく、過去の思い出と現実が少しずつ混乱し始めている母をやさしく見守ってくれているからラッキー。こんな家族の営みをじっと見ているのは、新しい父の家の庭に移植された昔からの1本の無花果の木だったが、その根元には母が埋めた数々の思い出が……。

2006(平成18)年12月1日記